

高専英語教育活動に関する一考察

南優次*

A Study on the activities of Kosen English Education

Yuji MINAMI*

Abstract : The objective of this thesis is to present the summary of English Education activities at UNCT since 2000. Based on this effort, above-mentioned activities are partially benefitted when considering the involvement of its PDCA cycle toward the local betterment of 'Model Core Curriculum' provided by KOSEN, the Institute of National Colleges of Technology, Japan. Especially, outcomes of education system are highly respected and students are expected to cultivate their own communicative attitude with English speaking people in and out of Japan. In order to focus on this issue, all activities are referred to as items of analysis.

Key words : English curriculum, PDCA cycle, communicative attitude, personal socialization

1 はじめに

筆者は、工業高等専門学校（以下、高専と表記する）における英語教育の現状と課題に関する報告書を、平成 13 年度と平成 20 年度のアンケートを基に、科研分担者として作成協力した。以下、その後の英語教育カリキュラム分析も含めて、平成 25 年から実施される文部省指導要領と、機構試案（コアモデルカリキュラム）に適切に対応することを目的として、私見を展開する。

平成 20 年度の科研アンケート結果では、回収率 75.8%、47 高専、156 名の英語教員からの有効回答から、以下の考察を得た。

高等学校(普通科)の3年間で約18単位、大学(一般教養)でおおむね6~8単位が必修とされていることを考えると、かなり少ないと言わざるを得ない。特に、卒業学年である5年生での英語が少ないのは、就職先の企業、あるいは進学先の大学における高専生の英語力の評価を落とす大きな原因になっていると考えられる。⁽¹⁾

また、平成 15 年 3 月の教育方法改善共同プロジェクト報告書には、以下のような提言がなされている。

提言 3-2 高専と高校(普通科)・大学(工学系)の英語の授業時間数を比較してみると、高専での英語授業時間はいずれにしても大幅に少ない。この量的なギャップは、もはや英語の授業の質的向上のみで埋め合わせをすることは非常に難しい。高専のカリキュラムの中で、これ以上の英語授業時間確保に限界があるとすれば、その他の方法で埋め合わせる工夫が必要となる。⁽²⁾

上記の考察を踏まえて、2 章で、宇部工業高等専門学校（以下、UNCT と表記する）の英語授業時間数の現状報告をする。また、平成 13 年から 20 年まで、UNCT の英語の授業単位数は、平成 15 年のプロジェクト報告書からの引用にある通り、変更はなく、その他の方法を模索することになる。

その他の方法として、①検定試験実施 ②夏季休業中の特別講義 ③e-learning ④海外語学研修 ⑤国際交流 ⑥図書館主催の単語コンテスト ⑦英語弁論コンテスト を実施している。詳細に関しては、第 3 章ネットワーク委員会で取り上げる。

第 4 章英語科会議は、UNCT 英語教育 PDCA を構成する作業となる。第 5・6 章では、UNCT 内外の教育体制を報告する。最 7 章では、法人化後の教育環境変化について報告する。

平成 21 年度から、UNCT 第 2 期中期計画・目標に基づいて活動中だが、平成 24 年 3 月国立高等専門学校機構の「モデルコアカリキュラム(試案)」が出版された。従って、平成 25 年から、UNCT の英語授業に関して配慮すべき指針は、以下の通りとなる。

英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を持ち、ごく初歩的な流暢さと即応性を持って、具体的情報や考えなどを理解したり伝えたりできる。⁽³⁾

これは、技術者が分野共通で備えるべき基礎的能力Ⅲ-B 英語の、本科到達レベル 3 適用レベルを示している。このミニマムスタンダードの証明があれば、専攻科到達レベル 4 分析レベルに進むことができる。このコアを土台として、以下の指標が示されている。

(2012 年 12 月 21 日受理)

*宇部工業高等専門学校一般科 英語教室

日本語と特定の外国語を用いて相手の意見を聞くことができ、効果的な説明方法や手段を用いて、自分の意見を伝え、円滑なコミュニケーションを図ることができる。⁽⁴⁾

これは、技術者が備えるべき分野横断的能力VIII-A コミュニケーションスキルの、本科到達レベル3適用レベルを示している。このモデルの証明があれば、専攻科到達レベル4分析レベルに進むことができる。

この到達レベルが示されたことによって、UNCT 英語教育PDCA サイクルが構成される。注意すべきこととして、このモデルコアカリキュラムそれ自身が、PDCA サイクルに組み込まれている点である。教育内容・方法の改善状況に応じて、5年周期で随時見直すことになるので、アウトカム重視の高専人材教育制度に、社会情勢に適応する柔軟性が担保されることになる。技術が支える社会を想定すると、常に技術は進歩・発展するという前提に立つことになる。この場合の技術というのは幅広い定義が可能であり、特定することはできない。が、「技術者」の定義は、文部省において、以下のように示されている。

数学、自然科学の知識を用いて、公衆の健康・安全への配慮、文化的、社会的及び環境的な考慮を行い、人類のために設計、開発、イノベーション又は解決の活動を担う専門的職業人⁽⁵⁾

英語教育の到達目標であるコミュニケーション能力も、上記の定義を反映したものとなる。志は非常に高いが、医療技術、建築技術、製鉄技術、列車製造技術などの一部の日本の高度先端技術は、定義通りの展開を見せている。モデルコアカリキュラムによって、ダイナミックに（動的に）英語教育を実践し、定義に基づく技術者を養成することは、日本において可能であると言える。

2 単位数及び科目名について

2-1 本校学生が5年間の一般科目教育課程において、習得すべき英語単位数は、以下の通りである。

表1 英語習得単位数⁽⁶⁾

	1年	2年	3年	4年	5年	計
M	6	5	3	(2)	1	15(2)
E	6	5	3	(2)	1	15(2)
S	6	5	3	(2)	1	15(2)
C	6	5	3	(2)	1	15(2)
B	6	5	4	5	2	22

(各学科の表記は、機械をM、電気をE、制御情報をS、物質をC、経営情報をBとする。)

M・E・S・Cの4年次の(2)単位は、選択科目をさしている。他は必修である。Bは、MESCの他4学科と比較すると、5単位数分英語に関する必修単位数が多いことになる。

次に、一般科担当の学習内容を以下に示す。

表2

学習科目名 (MESC 工学科) ⁽⁶⁾		1年	2年	3年	4年	5年
履修	総合英語 I	2				
	総合英語 II		2			
	英文法 I	2				
	英文法 II		2			
	イングリッシュ コミュニケーション I	1				
	英語表現 I	1				
	英語表現 II		1			
	英語演習 I A			2		
必修	英語演習 I B				2	
	英語演習 I C					1
選択	資格英語演習				2	
	イングリッシュ コミュニケーション II				2	

表3

学習科目名 (B 学科) ⁽⁶⁾		1年	2年	3年	4年	5年
履修	総合英語 I	2				
	総合英語 II		2			
	英文法 I	2				
	英文法 II		2			
	イングリッシュ コミュニケーション A	1				
	英語表現 I	1				
	英語表現 II		1			
	英語表現 III			1		
	英語演習 I A			2		
必修	英語演習 II B			1		
	英語演習 I B				2	
	英語演習 I C					1
	英語表現 IV				1	
	英語表現 V					1
イングリッシュ コミュニケーション B				2		

上記 MESC 工学科の科目構成と、B 学科の科目構成の違いは、以下の通りである。

- 1・2 学年次** —5 学科共通である。
- 3 学年次** —MESC 工学科の英語演習 IIA (2 単位) が B 学科にはない。B 学科に、英語演習 IIB (2 単位) と、英語表現 III (1 単位) がある。

- 4 学年次 一英語演習 IB(2 単位)は、5 学科共通である。
B 学科には、英語表現IV(1 単位)がある。
- 5 学年次 一英語演習 IC(1 単位)は、5 学科共通である。
B 学科には、英語表現V(1 単位)と、
イングリッシュ・コミュニケーションB(1 単位)がある。

選択科目についての相違点は、以下の通りである。

- 4 学年次 一MESC 工学科には、選択科目として、資格英語演習(2 単位)と、イングリッシュ・コミュニケーションB(2 単位)があるが、B 学科には無い。

科目名から推察される通り、MESC 工学科に共通の英語科目の延長科目がB 学科にあり、必修になっている。以上が、一般科担当科目である。

- 2-2 本校学生が専門教育課程で習得すべき英語科目名及び単位数は、以下の通りである。

表4 学習科目名 (MESC 工学科) ⁽⁶⁾

学科名	科目名	単位数	学年	区分
M・E	工業英語	1	5 年	選択
C	工業英語 I	1	5 年	必修
	工業英語 II	1	5 年	必修

表5 学習科目名 (B 学科) ⁽⁶⁾

	科目名	1	2	3	4	5
履修	外国語演習 I	1				
	外国語演習 II		1			
	外国語演習 III			1		
	外国事情 I A			1		
	外国事情 I B			1		
必修	外国語演習 IV				1	
	外国語演習 V					1
	外国事情 II A				1	
	外国事情 II B				1	

B 学科の場合、学生は、低学年時(1-3 年)に、専門科目として外国語関連の授業を5 単位分受けている。更に高学年の専門課程で、4 単位分外国語関連の授業を受けている。総数で、5 + 4 = 9 単位分を、専門課程で受講している。(現在外国語演習ではあるが、英語関連の授業を実施しており、英語科が非常勤等の世話をしている。) 2-1 で前述したとおり、一般科目で5 単位分、MESC 工学科よりも多く、英語関連の科目を、B 学科の学生は受講しているので、総数では、5 (一般科目) + 9 (専門科目) = 14 (単位) となる。従って、B 学科の学生は、MESC 工学科の学生と共通の一般課程の英語科目 17 単位分と、上記の 14 単位分を加えて、5 年間で、31 単位分の英語関連科目を受講することになる。

科目名から言うと、5 年一貫教育の特徴が、B 学科の英語表現 I ~ V 及び外国語演習 I ~ V に表れている。これは、M 科の設計製図・CAD I ~ V と同じ構成になっている。

平成 13・20 年度の科研報告書では、福島・富山商船・宇部・金沢高専については、文系学科として別データを取っている。

3 ネットワーク委員会

本校では、年 1 回本校英語教育に関する意見交換会を開催している。構成は、MESC B 専門教員各 1 名と、一般科英語教員全員となる。

議題は、①一般科目英語教員による英語教育現状報告、②専門教員による英語教育現状報告 ③その他。となる。

②の英語に関する専門科目に関する報告は、2-2 を参考に意見交換する。

①に関しては、一般科目英語教室の年間行事について報告する。以下その年間行事を列記する。

表6 英語科年間行事 (著者作成)

	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年
4	課題テスト				
5	TOEICIP (希望者) ・ 前期中間テスト				
6	英検第 1 回(希望者)				
7	TOEICIP (希望者)				
8	前期末テスト		TOEICIP 模擬		
	課題テスト		TOEICIP		
10	英検第 2 回(希望者)				
11	英語弁論大会				
12	TOEICIP (希望者) ・ 後期中間テスト				
1	TOEICIP (希望者)				
2	学年末テスト				
3					

以下、テストの種類別に内容を報告する。

① 業者テスト

4 月課題テスト

平成 24 年は、東京書籍による業者テストを、英・数・国の 3 科目について実施した。これは一般科の行事である。高専教育への導入という位置づけであり、英語に関しては、期末の成績に加味することはない。

9 月

1・2 学年対象に、東京書籍による業者テストを英語で実施した。このテスト結果は、英文法の学年末成績に加味される。

5・7・9・12・1 月

国際ビジネスコミュニケーション協会が運営する TOEICIP (Test of English for International Communication

Institutional Program) という、団体特別受験制度を活用した業者テストを、本校全学生希望者対象に実施する。実施の直接の目的は、TOEICIP400点以上を取得してもらう事である。

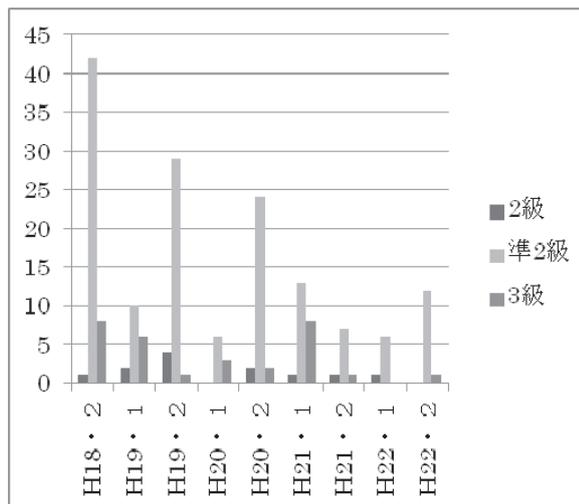
8・9月

3、4年全学生対象のTOEICIPを、本校で実施する。実施の目的は、本科生が目標とする300点を習得してもらう事である。この300点は、本校専攻科英語入学試験免除対象となる。8月は、授業内で模擬を実施する。

6月・10月

年2回、日本英語検定協会が運営する実用英語技能検定試験という業者テストの1次試験を、本校学生希望者対象に、本校で実施する。目的は、1、2、3年の低学年の英語学習の動機付けである。また、英検2級については、本校専攻科英語入学試験免除対象となる。合格者推移を資料として提示する。

図1 合格者推移 (実用英語技能検定試験) (著者作成)



② 学内定期テスト

5・8・12・2月

前期2回、後期2回定期テストを実施する。目的は、授業内容の理解度確認及び定着を図るためである。60点が合格ラインである。

③ イベント

11月

中国地区英語弁論大会参加は、本校英会話クラブのメインイベントで、出場者に対する指導・助言をクラブ顧問及び、全英語教員が協力して実施する。これは、本校が中国地区英語弁論大会の主管校となる年に、英語科教員全員が協力するための体制作りとなっている。

4 英語教員会議

2のカリキュラムと、3のネットワーク委員会での英語科行事活動を実行するために、英語科では、会議を実施する。ルーチンワークとして重要な作業は、以下の通りである。

- ① 授業計画決定
- ② 英検担当者決定
- ③ TOEICIP 担当者決定
- ④ 夏休み課題テスト担当者決定
- ⑤ E-learning (ネットアカデミー2) 登録と課題範囲決定
- ⑥ 次年度文部省検定教科書決定
- ⑦ JABEE ファイル作成・点検・廃棄作業

次年度の英語科の活動が効果を上げるために、①の授業計画決定作業が行われる。これは、本報告2に詳述したカリキュラムに基づいて担当者を決定する作業である。

次年度行事計画決定 → 公務分掌決定 → 授業計画決定 → シラバス作成・提出 までを前年度3月末までに完成させることが、ルーチンワークである。これが決定されると、後の②から⑦までは、適宜決定される。

現在英語科として、定期・不定期に実施を議論するイベントがある。以下、列記する。

- ⑧ 公開講座担当者決定
- ⑨ 体験入学講座担当者決定
- ⑩ 夏休み TOEIC 強化集中講義講演者決定
- ⑪ 全国英語弁論大会関連作業決定
- ⑫ 国際交流参加者支援
- ⑬ 英語科ホームページ作成・更新作業
- ⑭ 英語科中期計画策定・運用作業

上記①～⑭及びその他の活動内容を決定するため、ほぼ毎月会議をする。

5 学内体制

本校の学習・教育目標を以下に示す。

創造力をそなえ、「もの」づくりを得意とする、人間性豊かな技術者の育成をめざす⁽⁷⁾

そして、特に英語を含む語学の学習目標は、

人間性豊かな技術者をめざすために

(G) 的確な表現力とコミュニケーション力を

身につけること。(コミュニケーション能力)

②国際語としての英語の基礎的な読み、書き、会話ができること。(創造デザイン工学)⁽⁸⁾

②国際語としての英語の読み書きに関する基礎能力を持ち、会話ができること。(経営情報工学)⁽⁹⁾

と定めている。

上記の目標を達成するために、学内では、語学教育に関する